

子供の読書と図書館振興の月

○読書環境の整備を

評論家（近代史・出版評論）の紀田順一郎氏は「子供が本に興味をもたないが、どうしたらよいか」という相談をうけると「家に本をそろえたらどうですか。それも子供向きのものは、子供自身が発見してくるから、思い切つて大人の本をそろえなさい。そして好奇心を刺激することです。」と答え、更につけ加えて「親が読書している姿を見せなさい」とアドバイスすることについている。もちろん、家に大人の本をそろえるとか、子供の本は子供自身が発見するうんぬん：のくだりは異論や疑問の余地がないでもない。だが、氏のいたいかったことは要るに、子供が一人まえの読書人として成長していく過程の「最初のきっかけ」をどう与えるか。それは、読書環境の整備とそれを促す人の問題が重要なのだということである。

事実、読書活動などに多少ともかかわりを持つたことのある人なら、このことは容易にうなづけるはずである。「テレビばかり見ていて、さっぱり

本を読まない」と嘆くが、それは魅力ある本を与えないからテレビにばかり向いてしまうのである。

「子供はみんな本好きです」とは、ある文庫のお母さんの確信に満ちた言葉であるが、このことは多くの事例が証明している真実である。まず子供の身近に、魅力ある本を豊富にそろえることが、子供を読書好きにする第一歩なのである。

近年よく指摘されることであるが、

○図書館振興の月

それによれば、読書の効用は、今日種をまいて明日刈れるというような、「卑近の実利」をもつて判断すべきものではなく、「人類の文化の偉大なる産物はこの卑近なる意味においては無用なる読書、無用なる思索の中から生まれたのであることを忘れるべきではない。」という読書観になるのであるが、子供の読書についても、その質的意味は変わらないのではないか。

本を何冊読めば、これだけりこうになる。これだけ成績が良くなるといつたたぐいの「卑近の実利」に重きを置くべきではなく、小泉氏のいう「無用の読書」という読書の真髓を身につけることにこそ意義があるのでなかろうか。

秋の読書週間と並ぶ、図書館にとって意義ある社会的イベント（event）がこのところめじろ押しに続く。四月三日十日の「図書館記念日」五月五日を中心前後の二週間は「子供の読書週間」そして五月いっぱいは「図書館振興の月」といったらあいである。

○図書館振興の月

「読書の必要性と重要性は認めるが、いざ自分の読書生活ということになると…」と言葉を濁してしまい、ともすれば抽象論・消極論に陥りがちな現状を、子供の読書を基点にすえて、なんとか克服したいものである。

一時期は「脱活字化」が当然のようにいわれ、読書不要論さえもが幅をきかせたものである。今でもそれぞれが完全に克服されたとは言い難いが、子供の読書・児童書への関心、そして生涯学習に果たす図書館の役割への期待も着実に高まってきた。抽象論ではなく、読書環境の整備という具体を、活字離れ現象に流されて消極になるのはなく、読書の価値の復権を積極的に掲げ、この振興の月を真に意義あらしめたいものである。



図書委員会の貸し出し風景（東館小）

読書は習慣であるという面が確かに大きい。また子供の時に出会ったある一冊の本によって、その後の人生の方向が定まつたという経験談も数多く耳にする。子供の、そして人類の豊かな未来を約束するために、今我々は子供の読書に大きな関心を持たねばならない。しかし、そのための読書環境の整備充実は急務であると考えるのである。